中国現代文学の研究および教学

――中・米・日における現状と行方――

中国現代文学研究の第一線では、現在何が起こっているのか。日本、中国、米国を代表する三人の研究者に、研究対象の概念、研究手法の変化、大学の現況、そしてそれぞれの研究テーマについて語っていただいた。

藤井省三〈東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授〉×陳平原〈北京大学中文系教授・香港中文大学講座教授〉×王徳威〈ハーバード大学東アジア言語文明学科・比較文学学科教授〉

二〇一三年八月、愛知大学にて「分裂の物語・分裂する物語」と題した国際シンポジウムが開催され、一九四〇年代という「分裂の時代」における東アジアの問題が大いに討論された。この機会を利用して鼎談の席を設け、三人の先生に現在の研究状況について語っていただいた。

テーマは黄英哲先生（愛知大学）、小笠原淳先生（熊本学園大学）、そして濱田麻矢（神戸大学）の三人が予め用意し、事前にディスカッサントにお送りしておいたものである。中国現代文学研究の現況を知るための貴重な記録となった。

鼎談トピック……

1――「中国」「現代」「文学」とは、現在どのようなイメージで語られ、研究されているのでしょうか。この三つの言葉は、おそらく先生方が研究を始めた頃から大きくその意味内容を変えているのではないかと思います。三人の先生方に、この三つの言葉について語っていただくとともに、これからの中国現代文学研究が持っている課題についてお教えいただきたいと思います。

2――特に「文学」研究においては、今まで以上に非テクストメディア（映画、

演劇、テレビ、音楽、インターネット、漫画、ポスター等）研究に比重が置かれるようになってきました。このような「文字＋α」研究によって、文学研究の可能性が広がったのは確かですが、テクストの精読という従来の研究方式が軽視されつつあることもまた否めません。そこには、今や多くの資料を、原紙ではなくネット上で気軽に閲覧できるようになったことも影響しているかと思われます。この辺りの、文字／非文字、紙媒体／電子媒体のバランスをどうお考えになりますか。

3――それぞれ在籍していらっしゃる教育現場において、中国現代文学教育はどのような位置を占めていると思われますか。中国現代文学を勉強しようとする若い人は一定数育っているでしょうか、また修士論文／博士論文には、どのようなテーマが選ばれているでしょうか。さらに、院生ではない学部生向けの中国文学教育に、どのような工夫が必要だと思われますか。陳先生には、香港と北京の違いについても教えていただけると幸いです。

4――今後先生方はどのような対象に注目し、どのような切り口で文学研究に取り組んでいかれるご予定ですか。新しいプランがあればお聞かせください。また、先生方はいずれも現代中国文学の領域で少なからぬ影響力を持っておられますが、現代における文学批評と作家との関係をどのように分析されますか。例えば、両者の関係はバランスが取れているでしょうか、良好な関係にあるとお考えでしょうか。ご意見を伺えれば幸いです。

1――「中国」「現代」「文学」の定義

藤井　一つ目の質問ですが、日本の研究者である私にとって、近現代の日中関係は最大の関心事です。その次に、中国大陸と台湾、香港、シンガポール、南洋、韓国、北朝鮮、東南アジアなどの国家と地域、つまり東アジアとの関係です。それから欧米の華人、中国と欧米、このいくつかの問題は私にとってどれも重要で、たいへん興味を持っています。それから、「現代」とは何でしょうか（中国語の「現代」は日本語の「現代」と重なる部分もあるが、必ずしも同じ意味ではなく、日本語の「近代」と似た意味も有する。中国大陸では一九一九年の五四新文化運動からを「現代」とすることが多いが、詳しくは後述）。一般的に東アジアでは、一九世紀半ば以来の工業革命以後の社会が「現代」とされています。この「現代」はすなわち国民国家の時代を指します。しかし国民国家、すなわち民族国家、national state は、必ずしも最も理想的な社会ではなく、一種の過渡期にある社会です。一九二〇年代から三〇年代にかけて現代社会は成熟期を迎えますが、やがて八〇年代に至ると新たな社会、いわゆる後現代（ポストモダン）社会へと移り変わって行きます。これが私の「現代」という概念を推論する際のイメージです。文学については、文学は我々の国民国家がポストモダン社会に移り変わっていく過渡

期、我々のコスモポリタンとしての感情と論理を表現していることから、依然としてたいへん偉大なものです。文学は感情と論理を表現する道具であり、現在も非常に重要な意義を有しています。私からは以上です。

中国大陸における〝現代〟

陳　中国大陸の学者にとって、「中国現代文学」の中の「中国」をいかに理解するかは、実は変化の過程を経てきたものです。一九五〇～七〇年代には、それが中国大陸を指すことに疑問の余地はありませんでした。改革開放後、我々は視野を台湾、香港、マカオにまで広げました。マカオにはほとんど文学が存在しないので基本的には見過ごされていますが。この考え方は現在まで続いていて、我々の学科の編成に影響しています。そして「中国」を論じる方法については、「内外兼修」（内外を兼修する）となっています。ここで言う「外」とは、初期には文学的接触、交流に注目することを指していました。例えば魯迅（一八八一―一九三六）とゴーゴリ（一八〇九―一八五二）、魯迅と夏目漱石（一八六七―一九一六）などのトピックです。それから、中国文学とフランス文学、中国文学とロシア・ソビエト文学、中国文学と日本文学など、総合的な議論あるいは作家・作品研究です。これはかなりの程度、一九八〇年代中国で沸き起こった比較文学思潮の影響を受けています。しかしこの二十年である変化がありました。「比較」の立場を超え、外国文学と中国文学を混和させ、学科の境界を打ち破り、問題を中心に据えるようになったのです。東アジアに立脚し世界と向き合う、あるいは世界文学の潮流の角度に立ち、別の方向から中国文学を見つめる。ここには欧米の中国学研究者の努力があり、また、例えば中国社会科学院外国文学研究所から文学所所長に転任した陸建徳（一九五八―、中国社会科学院文学所所長兼文学系主任）など、中国国内でももともと外国文学を研究していた専門家たちが清末文学あるいは左翼文学などに目を転ずるようになったことも含まれます。また、鍵となったのは国際学術交流の増加により、若い世代の学者が各種の新思潮に接触する機会ができ、文学研究を進めるとき、かつてのように自分の領域に縛られ「中国の問題」を議論するだけにとどまるということがなくなったことです。

　第二に、「中国現代文学」の中の「現代」とは何かということは、中国大陸の学者にとっても同様に手を焼く問題です。まず、我々がどのように取り組んできたかをお話ししましょう。新中国成立後、最初に「新文学」あるいは「現代文学」を議論しはじめたとき、その線引きは非常にはっきりとしていました。すなわち、一九一七年から一九四九年で、これは毛沢東の『新民主主義論』（一九四〇年）を根拠としています。一九八五年、銭理群（一九三九―、北京大学中文系名誉教授）、黄子平（一九四九―、中国人民大学文学院講座教授）と私が共同で「二十世紀中国文学」の概念を提起し、いわゆる近代、現代、当代（「当代」とは同時代という概念を表し、中国

大陸では一般に人民共和国成立の一九四九年以降を指す）を一続きにしました。この概念は多くの論争を呼びましたが、現在では基本的に受け入れられています。多くの大学の中文系（中国の大学における「系」は日本の大学「学部」にあたる）が「二十世紀中国文学」というカリキュラムを開設しています。この課程が線引きする境界線は実のところ、仮に設けたものに過ぎず、いつでも、どこでも、それを越えてしまっていいのです。具体的には、それぞれの研究者は自らの学術的立場と理論の所与するところに基づいて、境界線を前後に動かして全く構わないのです。一八九五年から語り始めてもいいし、一八六〇年が起点だと考えても問題ありません。一九一七年を固守することも、今まで同様に尊重されるべきです。固定的で動かすことのできない「起点」が無くなったこと、これは非常に大きな変化です。視野に変化の訪れた今、「中国現代文学」がどこから始まったか、あるいはどの作品が時代を線引きするものであるかは、自分で決めることができるのです。その線引きが正しいかどうかは、論者の実力によるでしょうね。理論で納得させることができれば最も理想的ですが、どうしても無理でも、せめてつじつまを合わせる必要はあるでしょう。

問題なのは、教育省による学科の設置と、そこに潜む「全国統一」への願望です。日本や米国の状況とはやや異なり、中国には国家規格の学科コードがあります。現在、学術界はとうに一体化していますが、学科の設立制度となると、中国近代文学、中国現代文学、中国当代文学はそれぞれ切り離されてしまっています。しかも近代文学は古代文学の方に区分されています。かつて北京大学が夏暁虹（一九五三―、北京大学中文系教授）を東京大学での在外教育に派遣したとき、藤井さんはとても不思議に思われましたよね、東大が必要としたのは古典文学の教授なのに、どうして夏暁虹を派遣してきたのだろう、と。これは、彼女が教えるのは近代文学なので、学科の設立制度上は「中国古代文学」に属するためだったのです。このような学科の境界線によって学者の探索の歩みが遮られることはありませんが、大学院生にとっては頭の痛い問題です。例えば、修士、あるいは博士課程を受験したいとして、最初に近代文学、現代文学、当代文学のいずれを受験するのか確定せねばなりません。試験問題を作成し、採点する教師が異なるので、一旦申し込むと、もう変更することはできないのです。もちろん、合格してからは、自分の好きなように研究を進められますが。公的な体制の硬直化と学者の立場の柔軟性、この二つがとても大きな張力を作りだしています。

統一教科書は必要か

このような学術上での「全国統一」と「喧々諤々」との対立の最近の一つの例は、全国統一の教科書を編纂するか否かの議論でしょう。これについて、中国共産党宣伝部は大変積極的で、多額の資金を投入し、「馬工程」（マ・プロジェクト）すなわちマルクス主義理論研究・建設プロジェクトを進めています。すべて



シンポジウム
「分裂の物語・分裂する物語」
左から王徳威教授、藤井省三教授、濱田准教授、陳平原教授、陳国球教授（香港教育学院）

の主要基礎科目、例えば「文学理論」「中国古代文学」「中国現代文学」などに競争入札方式を取り入れ、チームを引っ張って来て、資金をふんだんに出す一方で、マルクス主義の立場に基づき教科書を編纂するよう要求するわけです。しかも、一章ごと、一節ごと、一段ごとに審査を行い、基準となる教科書をつくり出し、完成後は全国の各高等教育機関での統一使用を目指す、というわけです。資金援助額がかなり大きいことから、多くの学者が獲得を目指し積極的に動きましたが、審査が厳しすぎるので、獲得後は非常に苦しんでいます。これは明らかに一九六〇年代、周揚（一九〇八－一九八九、文芸評論家）が中心となって進めた文系学科の教材編纂を模倣しています。しかし、今日この路線を押し通すのはかなり難しいことです。教科書は編纂できるでしょうが、おそらく普及はさせられないでしょう。今は指導者の一声で全国の人民がその本を読むような時代ではないのです。この数年、政府はかなり積極的に、そしてかなり強気に、「思想的に正確」な教科書あるいは著作を推し出しています。しかし学術界内部はバラバラで、基本的には、それぞれがそれぞれの道を進んでいます。

〝現代文学〟の柔軟性

「大統一」に抵抗することでは、多くの学者の立場は一致していますが、具体的に何が「現代文学」なのかとなると、見識ある学者たちの間でも大きな見解の違いが存在します。「中国現代文学」に関しては、主流となる考え方では、絶えず境界線を拡大し、台湾文学、香港文学にも必ず目を配り、通俗小説、旧体詩も取り込み、また、映画の脚本および今も舞台に残る伝統戯曲も見落とすべきではないとされています。しかし、魯迅研究出身の王富仁（一九四一－、汕頭大学文学院終身教授）のように、これに反対する学者もいます。このように様々なものをひとつに収めるのは、五四新文化運動に関わった人たちの立場を消し去ってしまうに等しいというのが理由です。「新文学」は「旧文学」の打倒を旗印にして

いました。それを褒めても貶してもかまいませんが、新旧を一緒くたにする必要はありません。表面的な博識で立場の動揺を覆い隠したとしても、独自の道を歩むことができないというのは、実のところは、自分の観点が無いからなのです。文学史の研究者は、時勢に流されて研究を進めてはなりません。「新文化」の立場を固守するこれらの学者に私はあまり賛同できないものの、たいへん敬服しています。彼らの指摘はとても重要です。学者は必ず自らの価値基準を持つべきであり、「網にかかったものはみな魚」とばかり、二〇世紀に産み出された文化製品のすべてを同等に扱うのは、学者の取るべき態度ではありません。

新文学をやりたい人は新文学に、旧体詩や詞、通俗小説を研究したい人はそのジャンルに打ち込み、互いの立場をはっきりさせて競い合うのは、目下たいへん流行している「何でもかんでも受け入れる」よりは良いでしょう。こうした「意地の張り合い」は、実は最近二十年の「伝統への回帰」という大きな流れに対抗する意味をはらんでいます。中国経済が勃興したことにより、政府も民間もますます自信を持つようになり、批判の声に耳を貸さなくなっています。魯迅や胡適らの憤りの言葉等ももう受け付けなくなっているのです。多くの人々は、現在の中国の「モラルハザード」すら、五四新文化人が伝統に反対したこと、および儒家を批判したことによるとしています。まるで孔子に毛沢東をつけ加えるのが、中国の未来であるかのように。この問題では、イデオロギーによって歴史的な論述が歪められており、「五四」はほとんど怪物にされています。私は従来「半部の『論語』をもって天下を治む」（宋、羅大経『鶴林玉露』による。儒家の経典を読むことの重要性を強調した言い回し）という類のでたらめを信じていません。もちろん、五四新文化人たちの過激さや頑さ、そして知識の欠如等は反省されるべきだと思いますが、しかし彼らの抗う姿勢および反逆の立場には、私は肯定する態度をとりたいと思います。ある意味において、中国は強大になればなるほど魯迅や胡適のように自己を反省し、批判することが必要であると思います。

中国の「現代文学研究」を論じるには、避けられない難しい状況に直面せざるを得ません。この分野の潜在能力とは、一体どれくらいあるのか、という問題です。

文学の成果ではなく、それが活躍できる空間について考えてみましょう。三十年では短すぎるでしょう。もし百年に広げたとしてもそれほど余裕があるとは言えません。なぜなら、我々の博士教育は凄まじい速さで拡大しており、現在、毎年、およそ一五〇〇人の文学博士を養成しています。

研究トピックの動向

藤井　一五〇〇人の博士課程の学生の中で中国現代文学専攻はどのくらいいますか。

陳　今手元には二〇一〇年に博士学位を授与された数字しかありませんが、全部で一二五〇名、そのうち文芸学一七二名、中国古代文学二二九名、中国現当代

文学一六七名、比較文学および世界文学が一〇〇名、中国文学批評史が一〇名です。彼ら文学博士の大部分は高等教育機関に入り、研究や教育に従事します。しかし、これは、国家の学術人口のほんの一部に過ぎません。想像してみて下さい。こんなに多くの学者が、狭いアカデミックフィールドに集中しているのです。かつ、学術審査のため、皆成果を出さなければなりません。そこで、学者はあの手この手を使って、中心のトピックは言うまでもなく、周縁のトピックでさえも何度も焼き直すことになるのです。まさにこのため、この分野の研究者の多くが、自分の得意分野にとどまらず、次第に視野を古代中国に広げたり、もしくは思想、教育、文化等の分野に手を伸ばしたりしていくのです。例えば、前者では趙園（一九四五―、中国社会科学院文学研究所研究員）が執筆した『明清期の士大夫研究』（原題『明清之際士大夫研究』北京大学出版社、一九九九年）、後者では銭理群の『毛沢東と中国――ある知識人による中華人民共和国史』（阿部幹雄・鈴木将久・羽根次郎・丸川哲史訳、青土社、二〇一二年。原題『毛澤東時代和後毛澤東時代』上・下、台北：聯経出版、二〇一二年）があります。

この他に、もう一つ問題があります。この分野の研究者は、五四新文化運動の知識人の習慣を命として受け継いでおり、大学における研究に限らず、社会に介入し改革することを望んでいます。この点については、八〇年代が最も顕著でしょう。九〇年代以後、私たちは、次第に大学へ戻ってきたようです。この十年間、多くの人がこの問題を意識していましたが、しかしもはやどうすることもできなくなってしまっていました。中国全体の社会の変化に応じて、社会科学の声がますます大きくなり、人文学の学者たちは隅へと追いやられたのです。例を挙げてみましょう。中央政治局が講義を依頼するのは、法律、経済、軍事、都市管理、衛生についてで、いまだに文学や哲学の専門家に依頼したことはありません。これは毛沢東時代と大きな違いを生み出しました。毛沢東は、専門家と詩学や哲学の問題を討論することを好みましたが、鄧小平から江沢民、そして胡錦濤、さらに現在政治を担う習近平に至っては、私は彼らにはそうした修養も雅趣もないと思っています。国を治めるということについて、人文学は確かに「当面の急務」ではありません。「帝王の師」にならない人文学の学者が、現在の社会を注視する義務と熱情をまだ持つでしょうか。少なからぬ文学者が自分を「有用」に見せるため、積極的に金融、生態系、国境、民族等の問題の討論に参加しているのも現状です。しかし、大部分の人文学の学者は自分の陣地を守るでしょう。彼らは中国の錯綜する複雑な社会問題に「関心」は示しても「介入」する力を持たないでしょう。現在の中国では、経済学者は自信満々で、分かっていようが分かっていなかろうが何についても発言します。教育、文化、芸術、宗教、考古学、旅行など、すべてについて経済学の視点から思考し、切ってみせるのです。経済学者が得意顔の「独壇場」の一方で、人文学者は言いたいことを口に出

せない「失語」状態にあり、この二つが今日の中国の思想界の奇妙な情景を作り上げているのです。

人文学者に出来ること

新世紀に入って以後、私たちはずっと問うてきました。文学とはまだ力があるのか、と。この問いには、「現代文学」研究に従事する専門家が、魯迅の伝統を継承したいと思うのか、もしくはできるのかということも含まれています。いわゆる五四新文化運動の知識人は、学術の場を守るだけでなく、肝要な時には、そこから飛び出て社会に向けて発言してきました。現在の北京大学中文系にはいまだにこの「末裔」がいます。特に現当代文学を専門にする教授の中には、社会に介入したり、世論に影響を与えたりする人がまだいます。しかし一方では、マスメディアの影響を受け、その独立性と批評精神とがある程度ねじ曲げられています。毎回こういうことにいきあたると、「一兎を追うものは二兎を得ず」ということになります。学者たちに国家の大事に関心を持つよう期待しておきながら、同時に「度を過ぎる」ことがないように要求するというのは非常に難しいことです。北京大学の教授が「むちゃくちゃな話」をして民衆の怒りを買い、どうして首にしないのかと北京大学が責を問われることがありますが、大学側の態度はいつも非常におとなしいのです。それは、その損得をわかっているからです。中文系を例にすれば「問題がある」のは、大体近現代文学を専門とする教授で、言語学や古典文献、もしくは古代文学研究の教授は、普通そういうことをしません。しかし、私は学校側が石橋を叩いて壊すなどということがないように、「専門性」によって現当代文学研究者の「社会に対する関心」を扼殺してしまうことがないように願っています。

王　まずテーマから外れたことをお話しします。私は銭理群教授を非常に尊敬していまして、彼が右派だとは全く認識しておりません。

陳　我々の右派は皆さんにとって左派なんですよね……（会場笑）。

〝中国〟とは何か

王　今日、壇上にいる左翼の皆さんについては、特別に安全だということがわかりました。特別に「社会的に安定」していて、特別に右派である。これが、私が観察して得た実感ある結論です。

それはさておき、私も一つ目の問題、つまり「中国」、「現代」、それに「文学」についてお話ししましょう。私にとって、「中国」という言葉について語るとなると、まずは表象の問題と関係してきます。ここでの表象とは二つの意味があります。英語を用いれば represent で、いかに提示し、いかに再現するのかということですね。二つ目は原理の上で、いかに表象させるのかということです。要するに、我々が「中国文学」を語るというのは、中華人民共和国の文学のことなのか、それとも中華民国なのか、あるいはどの王朝のことなのか、清末以前のものなのか、ということです。それに、「中国」と「中国文学」を必然的に連続させる必要もありませんよね。これが一

つ目の問題でして、我々はこのことを問題化すべきではないでしょうか。つまり、読者や批評家の立場からは、「中国」とはアイデンティティの問題となるということです。たとえ政治地理上の位置や論述を表象しているとしても、あるいは一連の文学表現であるとしても、閲読者、観察者、歴史学者としての我々が、いかに「中国」と対峙し、「中国」を認識するのかはまた別の問題ですよね。私は今後十数年、二十年の間に、この両極の間における対話を、さらに思考、展開すべきであると考えています。

ところで、最近、復旦大学の葛兆光教授（一九五〇ー、復旦大学文史研究院院長）が『宅茲中国』（中華書局、二〇一一年）を出版したのですが、私個人たいへん啓発を受けました。これは非常に控えめな、語句としての、歴史概念としての、また現代の政治地理言説としての「中国」の系譜学的研究となっておりまして、周王朝以来の「何が中国なのか」という議論に言及するものです。もちろん彼は結論において、政治地理が絶えず変化し続けていると認識しています。しかしながら、少なくとも文化的な伝承の上では、「中国」は一つの語彙として、「断」と「続」、我々の言う「断絶」と「連続」の間にありました。つまり、「中国」は一貫して一個の論述であり、どの時代の中国知識人をも取り巻いてきた話題、焦点であり続けていたわけです。それはともかく、私個人としては、葛兆光教授の別の論点がとりわけ素晴らしいと感じました。それは、「宅茲中国」の他に、「中国」が周縁から見出されるという点を示していることです（葛兆光著、辻康吾監修、永田小絵訳『中国再考――その領域・民族・文化』岩波現代文庫、二〇一四年）。周縁はいかに「中国」を見ているのか。これも陳さんが先ほど触れた、「中国」という言葉の捉えどころのなさに関連しており、実際に一貫して、外在的な観点を必要としてきました。広く知れ渡った言い回しを使うなら、「他者」の観点から見るということです。したがって、現在「中国」という言葉に触れるとするならば、それをより広い文脈の中に置くべきでしょう。つまり、東アジアの文脈や台湾海峡の文脈、両岸四地（台湾海峡の両岸および中国大陸、香港、マカオ、台湾を表す）の文脈、それに世界文学の文脈において、この言葉と対峙する必要があるということです。したがって、いかにして「中国」を再び問題化するかについては、文学研究者としての我々の本能にかかっていると私は思うのです。用語であれ概念であれ、また論述であれ、我々の責任は、簡単な問題を複雑化させることにあります。いかにして「簡潔を複雑へ変化させ」、事態を簡単に、ある特定の論述のパターンに落としこまないようにするのか。これが我々の思考しうる方向ではないでしょうか。

例えば、最近の七、八年に米国で起こった「華語語系（Sinophone）文学」について――後ほど、この問題について議論を行うかもしれません――、やや極端な見方、つまり中国を外に排除した上での漢語、華語での文学創作に限るのだという議論がありますね。もちろん「中国」「中国文学」も華語語系の一要素だ

と強調する立場もありますが、こうした一連の込み入ったことがみな、我々が関心を抱いているものなのです。

世界の現代性（モダニティ）と中国の現代

いま一度、中国の「現代」に戻りましょう。「現代」も実に大きな言葉であるため、今日ここで詳しく説明することはできません。しかしながら、少なくとも先ほどのお二人がおっしゃったように、文学史における伝統的な定義では、現在も毛沢東による一九四〇年の「新民主主義論」の延長線上にあります。時間的な区分としての近代、現代、当代といった区分が当時の毛沢東の政治的アピールに必要であり、建国後もこの論述には必然性があったということですね。しかしながら、私はこの問題については、すでに瓦解が進んでいると考えています。これが私の「現代」への認識です。とはいえ、議題を一つ提出しておきましょう。それは、たとえ「新民主主義論」が自明と見なされていようが、この種の「現代」をさらに広義の、いわゆる「世界の現代性（モダニティ）」の追求の中に置いて、我々の対峙する多種多様な問題について考えるべきではないかということです。西洋における――もちろん今日、「西洋」という二文字に対しては、厳しい批判と検討が加えられるべきですが――一九世紀産業革命以降の現代化の追求と、現代性（モダニティ）への二種類の極端な反応――一つは堕落した文明の象徴、もう一つは人類が追求すべき目標と考えるもの――、これらをみな中国の「現代」、あるいは「現代性（モダニティ）」の議論へと引き込まなくてはなりません。そして、これらを真面目な思考対象とするならば、言うまでもなく「中国現代文学」も複雑な問題となり、文字表現、文字描写、審美の問題にとどまることはなくなるでしょう。

これまで私は二点についてお話ししましたが、第三点はより基礎的なものです。つまり、「現代性（モダニティ）」とは実は時間的概念で、時間の流れの中で、一瞬で過ぎ去ってしまう瞬間、いまここにある概念を強調するものです。しかしながら、何とも皮肉なことに、我々には目下「現代文学」という学科があり、我々がそれを定義しようとすると、永久不変の対象へと物体化させてしまうのです。いかに「現代」を定義するかということは、すでに二つ述べましたので、これについては後で再び議論してもいいでしょう。

伝統から〝文学〟を再考する

最後に「文学」についてですが、この言葉には、実に多くの論争、議論がありました。学科という点については、ここにいらっしゃる陳国球教授（一九五六―、香港教育学院人文学院院長、中国文学講座教授）や陳平原さんが、このテーマの系譜についてすでに整理を行っていらっしゃいます。二〇世紀初年から、「文学」は学科として、つまり系統的な制度として始まったのでしたね。「中国現代文学」という言葉の生命も、ようやく百年を過ぎた程度で、現代の発明と言えます。しかしながら、もし我々が「現代文学」の「文学」をさらに広げるとするならばどうでしょう……。実のところあまり熟していない方法ですが、皆さん

のご参考のために提出いたしましょう。西洋の観点では、「文学」とは一八世紀以来の西洋ロマン主義の後における、審美運動の重要な表現方法であり生産品でして、こうした審美性はここ数十年の間に厳しい批判にさらされてきました。つまり審美を軸とする文学観ということですね。特に左翼の皆さんが強調するのは、これが西洋における拡張主義の萌芽であり、資本主義や中産階級の始まったときに「文芸運動」の追求によって生まれた理念であったということです。これにはイデオロギー的な基礎と制限があるため、我々はその批判の強度とともに、そのイデオロギーの限界について認識すべきでしょう。しかしながら、中国の文学伝統を振り返ると、「文学」とは、「文」の学であり、文章の学に他なりません。今日この時この場所では、特に後で触れる二つ目の問題と呼応するのですが、この「文」の概念――再び英語をひけらかすと、manifestation となります――が表しているのは、「文」とは一種の筋道、脈絡であり、形式、構造であるということ、そして多種多様な記号によって打ち立てて世界を認識し、意味付けるシステムだということです。この概念から言えば、我々の伝統文学の定義は、時代遅れではないばかりか、かえって再び「何が文学なのか」という観点について考える機会をもたらしてくれるわけです。もしかして、これが契機となって、我々が「文学」そのものを提起するときに、また取り上げることになるかもしれません。

さて、「中国現代文学」を、我々はいかに教え、いかに学び、いかに定義するのかについては、もちろん議論紛糾する点でしょうが、先ほどの王富仁式、銭理群式、藤井式、平原式の観点を私も受け入れます。しかし、喧々諤々の議論を山ほど行った後でも、歴史の限界を認めなくてはなりません。また本日、我々は第三の場所、つまり日本という環境にいるからこそ、言いたいことを言えて、議論を行ったのかもしれませんが、この歴史的な表象にも実際のところ限界があるものです。では、いかにその限界を発掘し、いかに限界の中からさらなる可能性を探し当てるのか？　これについて私は潜在的な可能性があると思いますよ。

つまりですね、結局「文学」が役に立つのかどうかですが、もちろん役に立つと思います！　文学部の教授として我々は学生に伝えるべきですよ。もちろん役に立つってね！　じゃなかったら、我々はここで何を話しているのでしょう、そう思いませんか？（会場笑）それに私には全くもって確信のあることがあります。それは、我々は虚構性、想像性、論述性など多くのことについて語っていますが、最も基本的なことは簡単なものを複雑にすること、つまり、虚構の形式で回顧、検討、想像し、さらには歴史が及ばない姿を発明することなのです。これこそ文学者の想像力が、社会へなしうる最大の貢献に他なりません。

文学者は社会といかに関わるか

最後の問題を用いて――これは鼎談ですので、我々はテーマの交換をすべきでしょう――、陳さんにさらなる説明をお

願いしたく思います。というのは、あなたが先ほど取り上げたテーマについてですが、まだお考えが完全に展開していないと思ったのです。あなたは一方で、現代文学の研究者として我々は社会を意識するべきであり、また我々の意識を社会に普及させるべきであり、さらに広義の政治社会の問題にも我々は発言するべき立場を有すると強調されていたようですね。しかしながら、あなたはその一方で、経済学部やその他の学部の同僚を取り上げて、彼らは越境、横断しているために、彼らの語ったものは我々には必ずしも合理的、当然のものには見えないというように、異なる言い方をされました。特に、私はいま国外にいるのですが、文学部の同僚の多くは、そもそも文学をやっていません。我々の伝統が定義してきたもの、特に日本のアカデミズムが下したような標準的な定義の「文学」をやっていないのです。私は米国にいますが――中国にいるときもありますが――文学領域の同僚は、本当に不思議なことに、「文学」をやる人は少なくて、文化政治、ロボット、チベット問題などをやっているのです。これもあなたが言うところの、文学者が関心を抱く国家経済や社会の一部分でしょうか？　あるいは、別の角度から言えば、あなたはこれらの同僚は人の褌で相撲を取っていると思われるのでしょうか？　あなたの疑問には未解決な部分があるようなので、私はもっと詳しく知りたいと思います。

陳　理論上は、文学研究者には自身の専門領域から飛び出して、経済・政治・軍事などの話題を論じる権利があります。ひるがえって言えば、経済学者もまた、文学・芸術・宗教などについて発言する権利を持っています。私が目下の中国の「経済学帝国主義」に同意しかねるのは、彼らが過度に自信を持ち、民衆もそれに盲従しているからです。人文学者として、私たちは時に自分の専門を越え、ある種の公共の話題について発言することもあるでしょうが、まずおおむね自省の能力を持っており、さらには事前に予習もするでしょうから、あまりにも素人の意見を述べるということにはならない



シンポジウムの聴衆席

でしょう。社会に対する関心は持ち続けたいと思っています。でも一旦専門的な問題に抵触し、自分に判断する能力がなければ、いい加減に話をするべきではありません。私の場合は両面作戦です。「井の中の蛙」にも反対ですが、毎日メディアでベラベラ話すのも良しとしません。もし毎日話をすることになれば、かならずや知っていることも、知らないことも話さねばならなくなるでしょう。私もたまにメディアで発言することがありますが、自分が比較的詳しい領域に限っています。度胸があるかないかの問題ではなく、専門家の旗印を掲げる以上、知識の準備がないならみだりに話すべきではないのです。二、三年前、河南省で曹操の墓が発掘され、考古学者が認定したとき、一人の文学畑の教授が出てきて疑義を唱え、一席ぶちましたが、一目見て素人とわかりました。その道の基礎訓練がなく、地層も知らず、器物も知らず、陵園建築や墓地の配置も知らずにただ文字資料に依拠して考古学の問題を語るなどというのは、してはならないことです。言い換えれば、自身の専門を持つと同時に社会への関心も保ち続ける、これこそアカデミシャンの理想に近い状態といえるでしょう。

外から見る〝中国〟

藤井　中国にとっては、私は外国人です。外国の中国文学研究者、とりわけ現代、当代の中国文学研究者は、中国の、あるいは華人の感情やロジックを日本に紹介するのが最大の任務です。ですから社会についての発言は、日本の国民に中国、台湾、香港をより理解してもらうために行うわけです。そこで社会に対する関心についても、やはりお二人とは立場が異なります。私たちはあなたがたの活動の後から着いて行き（笑）、あなたがたの示す社会への関心に、私たちも関心を持つのです。

王　それはとても中国式の、儒家主義的な、「士は以て弘毅ならざるべからず、任重くして道遠し」（『論語・泰伯』曾子の語。士とはひろい包容力とつよい意志をもつ責任があり義務がある、何となればその任務は重く、その人生行路は遥かであるからだ。吉川幸次郎訳による）ではありませんか？　いや、私は実際のところ同意しているんですけどね。社会への関心が重要な議題であることに同意します。とくに現在の中国のような状況では――もちろん私たちの立場は異なります。私は台湾出身で、しかもアメリカで教えています。したがって私の事情は藤井さんと同様で、私の専門的役割とは国外の、中国のバックグラウンドを持たない学生に、有効な方法を用いて中国とは、広義の中国とは何かを理解させることです。もちろん中国への関心について言えば、時にはとても分裂したものになります。時には客観的に、時には自身の台湾の立場から、そして時にはまた異なる理念の立場から発言します。

　しかし先ほど私が一言申し上げたかったのは、つまり――これは陳さんに賛成しているのですが――現在の二〇一三年において、これは倫理の問題となるのです。もちろん公民社会や公共の知識人に対しては、もうこれ以上語ることができ

ないほど語ってきました。しかし文学にも基本的な、文学の倫理の問題があります。最近台湾やマレーシアでパクリ問題が取り沙汰されてきましたが、このような『文心雕龍』（五世紀末、南朝梁の劉勰が著した文学理論書）でいう「文心」の問題（『文心雕龍』序志は「文心とは文をつくるのに心をくだくこと」とする。興膳宏訳による）について話すと、いかにも渺茫として深遠で、とりとめのない問題のように聞こえますね。しかしここで言う「倫理」は「道徳」ではありませんし、この両者を混同することはできません。あなたが先ほど述べた物事の是非や取捨といったことは、壮大な、迂遠な考え方に聞こえますが、今このときにはその必要性があるのです。例えば、形勢がすばらしく見えるにつれ、ますます皆が夢を見るようになっているとき、どんな夢を見られるか、どんな夢を見ないのか、夢を見ることを望むのか、といった問題は、最後には微妙な、判断の問題となりますが、これこそ私の言う文学の倫理性なのです。

2　文学研究と非文字メディアとの関係

藤井　二つ目の問題は、映画・伝統劇・テレビ・音楽・インターネット・漫画・ポスターなどをどう見るかについてです。これらの新領域は、いずれも言語によって構築されています。例えば音楽であっても、コンサートの広告や評論などは、やはり言語にもとづいて構築されています。ですから、映画から音楽に至るまで、これらは私にとってはすべて文学研究の対象です。とはいえ、私自身にこれらのテーマを研究できるかというのは、また別の問題ですが（笑）。でも、もし同時代の中国のロックを研究したいという学生さんがいれば、私はもちろん応援します。

王　その通り。

藤井　なぜなら、それも文学研究の対象なのですから、そして、大学、とりわけ資本主義国家における大学（笑）もまた文化産業の中のひとつの業種で、象牙の塔ではありません。「大学は象牙の塔だ」という言説は、国民国家なる制度が始まったばかりの頃に、大学と政府が結託して自己を権威化した産物なのです。国民市場の成熟した社会、大衆文化の発達した社会においては、大学もまた文化産業の中のひとつの業種にすぎません。だから、学生の要求にしたがい、社会全体の要求によって、大学の教授たちの研究対象と方法も、変化すべきでしょう。ただし、私たちが覚えておかねばならないのは、いわゆる新文化領域、映画からポスターまで、あるいはインターネットもまた、伝統から離れられないということです。

王　その通り。

藤井　だから、文学、文化研究にとって、古典文学はやはり欠くことのできないものなのです。同時代の華語圏文化研究にとって、詩文白話の古典文学および

モダンクラシックとしての五四文学の教養は、欠くべからざるものなのです。

陳　ちょっと前の話題に戻ります。今回の鼎談のために学生に手伝ってもらって、二〇〇八年から二〇一二年の間に北京大学中文系の大学院生が提出した学位論文の題目を集めました。近代・現代・当代文学の三専攻の大学院生だけで、つまり「現代文学」に関係してくる可能性のある比較文学や文芸理論などの院生を数に入れないで、毎年およそ四〇篇あまりが提出されています。細かく見てみると、この四〇篇の修士あるいは博士論文の中で、近代文学と現代文学専攻のものは基本的にやはりテクストを中心としています。当代文学の方は、より文化研究に傾いていて、映画・テレビ・インターネット・漫画など、もはや文字文献に限っていません。ここからまず感じられるのは、藤井さんが言われたように、文学研究が文化研究の方向に伸びていくのは、それなりの理由があるということです。しかし同時に、この流れが形づくられたのは、これまでの文学史研究に何らかの欠点があったことを浮き彫りにしているのではないかということを反省してみなくてはなりません。

図像とメディアの脅威

近年私は一貫して、中国の大学が一九〇三年以降文学史を中心に文学教育を施してきたことによって引き起こされた問題に注意を払ってきました。教室での講義が中心で、また教学理念としてなるべく多く早く楽に効果的に、中国文学の「系統的な知識」を伝授することが求められてきたため、結果として学生たちは作家名や作品名、思潮や流派については膨大な知識を詰め込んでいるのに、最も基本的な文学を鑑賞する能力が欠けているという事態を招きました。私は昨日の講演でパワーポイントの問題に触れましたが（会場笑）、今はどこの大学でもパワーポイントでの講義が強く要求され、学生たちも画像とテクストを綺麗に組み合わせた発表を聞くのに慣れてしまっています。もし音声や画像なしに、一字一句丁寧に意味を汲み取っていったとしたら、最も奥深い微妙な部分に到ったところで、教室で誰一人起きていないことに気づきうろたえることでしょう（会場笑）。これは一つの大きな問題、つまりマスメディアの思考方式とセンスが、大学教育の場に強力に介入してきているという事態を示しています。

昔の大学教授は悠々と上に構えて、自身の思想や知識をマスメディアの力で拡散できればいいと考えていた。今は違います。メディアの力は強く、彼らは自身で話題を選び組み立てることができる。大学教育への批判も同様で、私の見るところほとんど「ネガティブキャンペーン」の域にまで達しているものも少なくありません。大学生や大学院生も、彼らがネットを見ている時間はおそらく教室や図書館で勉強している時間より遥かに長いでしょう。こうなると、メディアが生み出した話題が何よりも影響力を持つということになってくる。数人が集まって話を始めれば、政治の話題から下ネタまで、大体どこでも一緒になってしまう（会場笑）。皆が口にする冗談まで大体似

通ってくるのですから、メディアの影響力や推して知るべしです。現在の中国では、大学教授にメディアを変える力はなく、むしろメディアに引きずり回されている。これは大いに警戒すべきことです。

データベースの陥穽

それから、今の大学生は、文学を専門にしている者も基本的な訓練をおろそかにしていて、言語や、文字や、審美観、文体や、文学ジャンルに対する一種の感覚を、基本的に失ってしまっています。論文だけを読むと、すらすらと立て板に水のごとく、すべてのことを論じ尽くしているような、すばらしい印象を受けますが、仔細に見るとぼろが出ます。例えば魯迅を論じるとしましょう、そのときジャンルごとのスタイルの差異を考慮すべきではないでしょうか。魯迅全集の検索は今やとても便利で、日記であろうと手紙であろうと著作であろうと、あるいは詩であろうと雑文であろうと小説であろうと、キーワードをぽんと入れると、ずらっと出てきます。しかし検索で弾きだした言葉は、前後の文脈や著作時の心理状況を離れてしまっているので、その理解に歪みが出てくる可能性が大いにあります。梨園から出た言葉で、「役者は、古くなった衣装を着ようとも間違った衣装を着てはならない」という諺があります。つまりそれぞれの衣装にはそれぞれの役割があるのです。物を書くのも同じことで、ジャンルやスタイルの違いを考慮しないで、何でもかんでもごった煮にするというのでは問題です。作家自身が故意に「クロスオーバー」や「ミックスアンドマッチ」の実験をしようとしているのでない限り、具体的なテクストを論じる際には、必ずそのコンテクストとジャンルを考慮しなければなりません。例えば魯迅が鄭振鐸（一八九八―一九五八、作家・文学史家）の『挿絵付き中国文学史』（原題『挿図本中国文学史』樸社出版部、一九三二年）を批判した言葉を引用する人は多いですが、あれは魯迅が友人に宛てた私的な手紙の中にある言葉で、頼りにはなりません。おまけに手紙の日時を見れば、そのとき鄭振鐸の本はまだ出版されていなかったのですから、魯迅は明らかに広告の影響を受けていたと考えられます。魯迅の文章を引くときには、日記や手紙と公に発表された文章を一緒に扱ってはいけないだけではありません。たとえ公刊された文章でも、雑文と学術著作の間には大きな違いがあります。雑文は「一箇所だけつかまえて攻撃する」ことも可能ですが、著作はやはり客観的で公平でなければなりません。なんなら、魯迅が『紅楼夢』に触れた文言を見てみてください。雑文と『中国小説史略』では書き方が異なっています。手紙といえば、昔の方々は社交辞令を交えて書くのが習いでしたから、銭鍾書の返信を見てみると、相手のことをしきりに褒めちぎっていますが、彼の本音であったはずがありません。夏志清先生などはある時ため息まじりに、ある学者が夏先生からの返信をいろいろなところで見せびらかし、あまつさえそれによって少なからぬ利益を得たらしいという話を披露しておられました。私的な手紙が学術に鑑定を下してしまった例で

す。同じ理屈で、日記と小説も同等に見ることはできません。しかし電子検索が出現し、検索すると結果がすぐに出てくるため、上下の文が断ち切られ、ぽつぽつと拾い上げただけの言葉が執筆者の好きなように並べ替えされてしまうようになりました。こういった著述は本当に危険です。

中文研究に求められるもの

他の場で述べたことがあるのですが、文字や文章、文体、ジャンルに対する細やかな感覚は、中文系の学生が持っている最大の武器です。同じテクストに向かいあったとしても、歴史系の学生は史料としてしか見ないかもしれませんが、中文系の学生は文字の背後にある心情や、語気に含まれた書き手の立場やテイストを読み取るでしょう。文字に対してこのように寄り添い、汲み取り、分析し、批判する能力こそ、中文系の学生が持っている、最も基本的な能力であるはずです。しかし今日ではこうした問題を論じることなく、皆こぞって文字の外へと駆けだしてしまっています。我々は「新型兵器」を手に入れてあれこれいじり回しているのですが、自分の立脚点を見失ってしまったことに、いつか突然気づくでしょう。大局から見た歴史的判断や、資料収集にかけては、中文系は歴史系にかないません（会場笑）。中文系が得意としているのは本来、文字に、文章に、文体に対する感覚と、審美上のセンス、そして想像力なのです。これらがもう古くさいからといって放り投げてしまったら、それでは我々の基本的な訓練と専門的な特技とはどうなるでしょう？　大学で教鞭を取っていない人は、なぜ「基本訓練」を強調する必要があるのかがわからないかもしれません。学術上の潮流は一旦形成されれば壮大な流れとなり、確かにブームの先頭に乗っている多くの人を成功させます。しかし彼らが「波乗り」している様子を傍からあれこれ真似してみても、完全にマスターしないうちに大きな波は過ぎ去り、あたら無駄な時間を過ごしたということになってしまいます。教学上では、私は胡適の「流行に誘惑されて動揺してはいけない」を信用しています。ここ数年博士論文の口頭試問に出席して強く感じるのは、題目は近年いよいよ見栄え良くなり、思考もいよいよ柔軟になり、視野もいよいよ広くなっているのですが、困ったことに、往々にして問題点を突っ込まれると弱さを露呈してしまいます。これはどうしてなのかと疑問に思わざるを得ません。ひょっとして、近年の我々の教育理念は、「新しさ」を追求するあまり、「継承」をおろそかにしてしまっているのではないでしょうか。

王　（笑）二つ目の問題については、私は先ほど間接的に述べました。私は完全に藤井さんのお考えに同意します、つまりジャンルの変遷というのは一貫して存在しました。ならば二一世紀に入って、これほど多くの様々な新しい文学が、ことに映像や音の方面における新しいあり方が出現したのであれば、我々はこうした存在を正面からとらえる必要がありますし、またこうした新しい文学ジャンルをどのように解釈するのかについて、積

極的に企画し、参与し、思考する必要があります。これはちょうど清末に小説が、あるいは他のジャンルが文学の領域に入ってきたときと同じことです。我々は百年を隔てた時空で、再び文学とは何かという問題について思考を迫られているのです。しかし清末と現在が異なるのは、我々には文学という専攻や文学批評という職業がある、ということです。ですから必ず新しい、この新しい概念再構築の過程で、我々のこの学科が持つ持続性および新たな展開の可能性をひらいていかないといけない。この意味において、私はあまり心配しているわけではありません、というのも再度藤井さんの話に呼応しますが、ある新しいジャンルについて研究するとき、それは批判でも、鑑賞でもいいですが、そのときは必ず一つの論述の中で行う、つまりある一つのディスクールのシステムの中で行うわけです。ですから文学批評という学科あるいはその論述は、二〇世紀以来、目の前のめくるめく新しい文化が生み出す現象をどのように見るのかについて、我々に教えてくれている、というのが私の一つ目の観察です。

審美とは、想像とは

二つ目の観察も先ほど申し上げたことと関連しますが、実をいうと陳さんはちょっと違う言い方をしていました。私が述べたのは、私が置かれているコンテクストの制限についてです。今日のアメリカで「審美」という価値観を持ち出すことは困難です、なぜならひとたび「審美」と口にするとすぐさまプチブルだと認定されてしまうからです。そうでしょう、すぐさま政治的に正しい同僚が、君のそれは西洋資本主義によって生み出されたものだと批判してくるわけです。ですから我々は言辞を正して、歴史的に正しい左派の同僚の肩をどこまでも持って、「審美」だけではだめなのだときっぱり言うのです。しかし私も実際「審美」という言葉そのものの限界を理解しています。よってこれを別の方向から説明してみたいと思います。先ほどの話に戻って、ここで言う「想像力」とはむやみに妄想を膨らませることではありません。私がいる西洋では、もちろんこれは一七、八世紀以降、カントの美学と結びつけられて以来、想像については、繰り返し繰り返し、この「想像」とモダニティの関連について多くの批判と新しい貢献が築き上げられてきました。しかし中国の伝統においても、「神思」などの概念が一貫して存在してきました。ですから「想像」というのはむやみにあれこれ思いつくことではなく、すでに何らかの継承があり、学術的素養があるというしっかりした土台のもとに、この世界の様々な事物に対して解釈を行う方法のことなのです。先ほど、想像力が強い人ほど、同じものから新しいものを引き出し、単純な事物から複雑な色とりどりの様相を見いだすことができると述べました。これが文学に従事する者の基本的なスキルだと私は思います。またその他に、「想像」のもう一つの部分は判断力です。これこそ私が述べたところの、文学的倫理における一種のエネルギーとなります。そこでこれらを合わせて、それ

を鑑賞と呼ぶか、審美と呼ぶか、それはどちらも可能だと思います、この文脈で言うのであれば。

しかし確かに、私はもっと話を大きいところまで持って行きたいと思っていますし、この点、陳さんより楽観的です。我々の影響力は、少なくとも他の人文学科の同僚たちにも知っておいて欲しいのですが、大きいはずだと思います。歴史学を修める人には想像力が必要ないとでも言うのでしょうか。または経済学者には想像力が必要ないのでしょうか。だからこの意味において、多くの場面で私は同僚たちと一緒に、特に学生たちに向かって、以下のことを説明しています、つまり、文学というものが役に立つかどうか聞きたいって？　もちろん役に立つよ、と。しかしこの問題は実は我々が最も関心を抱いていることではありません。むしろ課題は、我々がこのような文化のコンテクストにあって、各種様々な問題を、いかにして自分自身の方式でより複雑に、より厳密に解釈していくのかということにあります。もしかしたらこれについてより頻繁に言及している同業者たちや他の領域の研究者たちも完璧には回答できないかもしれません。ですからここにおいて、この文字、広義の文字とテクストに対する解析の能力が、非常に重要になってくるということ、これに私は賛同いたします。

陳　すみません、一言いいでしょうか。

王　もちろん。

陳　これといささか関係のあることですが、我々はみな一九五〇年代の生まれです。最近昔の学生に会ったのですが、彼の言葉が私を大変驚かせました。私は確かにそれまでそういう風に考えたことがなかったものですから。彼が言ったのは、「先生たちが学問をみんなやり終えてしまった」と。（笑）

王　ありえないでしょう。

陳　まあ聞いてください。彼が言うには、文化大革命後に学術界の舞台に上がったこの一九四〇～五〇年代生まれの人たちというのは、学術生産力が高く、今でも現役で活躍していて、そのせいで一九七〇～八〇年代生まれの世代はなかなか頭角を現せないと。先生たちが舞台の中心でこんなに長いこと演技しているものだから、後から来る人は舞台に上がろうと思ったら、とにかく先生たちとの間にきっぱりと「線引き」しないと、注目を集めることができない。「先生たちが学問をみんなやり終えてしまったら、我々はどうすればいい？」（会場笑）いや笑いごとではありません、そこには戦略上の考えがあってのことなのです、だがこれは遅れてきた者の「影響の不安」でもあります。若い世代が囲みを突破しようとすれば、必ず武器を取り替え、新しい鎧兜に着替えなければならない、こうした心情を我々は理解する必要があります。言うなれば、一代ごとに一代の学問があるというわけです。すみません、話がそれました。話題を戻してください。

3　中国現代文学教育の現在について

藤井　東京大学文学部における中国現代文学教育の基本的な状況についてお話ししましょう。まず東京大学文学部の中文研究室の状況について、簡単にご紹介します。私たちの研究室では、学部生の一学年の定員は七名だけです。東大の学生は入学して一年半たった後に自分の専攻を決めることになっています。毎年中文研究室を選択する学生は、三名から五名しかいません。だからもともとの定員の七名を満たしていないことになります。こうした状況は私が中文研究室に進むことを決めた四〇年前から現在まで、ずっと変わっていません。私は京都大学の中文研究室もほとんど同じだと思います（濱田：学部生は一人から三人くらいですね）。大学院の修士課程の定員は五名で、博士課程は四名です。しかし毎年、修士課程を受験する人数は定員の三倍から四倍です。東大は現代文学、当代文学、近代文学に分けて学生を募集しておらず、詩文、白話、現代文学、古代文法・音韻、現代文法の区別があるだけです。全員が一緒に試験を受け、成績がいい順に採用されるのであり、筆記試験と論文の成績の良いほうから五番目までが合格することになります。しかもこの五名のうち現代文学研究を志望する者が多数を占めています。だから私自身は現在合わせて一五名の院生を受け持っています。そのうち博士課程の学生は一一名です。中文研究室の院生は合わせて三十数名くらいですから、ほぼ半分が現代文学を専攻していることになります。

東大中文の研究テーマ

　このほか、私が指導している院生一五名のうち、日本人の学生は四名しかいません。中国大陸からの学生が最も多く、合計九名いて、台湾からの学生がここ数年はやや減って二名だけです。彼らの専門領域について見ていくと、五四時期の文学や文化を研究する学生は三名だけで、それぞれ張愛玲（一九二〇―一九九五）と老舎（一八九九―一九六六）を研究しています。中華人民共和国、いわゆる当代の文学や文化を研究する学生は七名。台湾文学や文化を研究する学生は五名。そのうち映画やテレビドラマを研究するのは三名です。もちろん私一人では一五名それぞれの専門をもつ学生たちを指導しきれませんから、東大教養学部の伊藤徳也教授や東洋文化研究所の松田康博教授にこれらの学生の副指導教員をお願いしています。それから毎年学外から台湾文学と華語映画の専門家を講師として招いています。これまでは河原功先生（元成蹊高等学校教諭）に台湾文学について何年も講義してもらっていましたが、去年河原功先生は定年退職なさいました。今年からは垂水千恵先生（横浜国立大学留学センター教授）に台湾文学を講義してもらっています。映画研究については、この一〇年来ずっと三澤真美恵先生（日本大学文理学部教授）に授業をしてもらっています。これが東大の中文

研究室の基本的な状況です。日中、日台の比較文学や、映画やテレビドラマを研究する院生もますます増え、外国人学生も増えたので、私はとても嬉しく思っています。ただ私が心配しているのは、五四文学を研究する者が減っていることです。このような状況は、将来の日本の中国文学教育に影響を及ぼすことでしょう。

陳　北京大学の中文系の規模は比較的大きく、職員を除いて、総勢九〇名余りの教員がいます。現当代文学を専門とする教員は、いまのところ一八名です。しかし古代文学教育研究室の夏暁虹、あるいは比較文学研究所、文学理論教研室、民間文学教研室にいる教員のうちいくらかは、現代文学分野のテーマも指導可能です。大学院生については、毎年一四〇名ほどを募集しています。博士課程が五〇名、修士課程が八、九〇名です。中文系で博士課程の学生を受け持つ資格のある教授はだいたい六〇名ほどですが、毎年平均して博士課程の学生を一人受け入れるか受け入れないか、ということになります。全部で一〇の専門領域があり、文学が六領域、さらに言語学が三領域、古典文献が一領域です。一つの専門領域のうちに博士指導教官は何人もいますが、学生の選択肢はかえって限られています。なぜかといいますと、藤井さんにお尋ねしますが、もし多くの学生があなたを指導教官に選んだとしたら、他の教授が不満を持ちませんか。

藤井　そんなことはありません。

陳　私たちのところではだめですね。教授たちの感情を考慮しなければならないため、それぞれの教員は毎年博士課程の学生を一名、多くとも二名しか受け持てません。このような割振りは、学生の希望ではなく、学科の構造でもなく、全くのところ「安定した団結」のために必要なのです。カリキュラムについては、修士課程が三年、博士課程が四年で、もし国外で研修するならさらに長くなります。このようになってくると、例年在籍する大学院生は中文系全体で大体五〇〇名くらいです。こんなに多くの博士課程や修士課程の学生が毎年「中国現代文学」に関する学位論文を四〇篇書き上げるというのも、いたって普通のことなのです。

香港と北京

私は同時に香港中文大学でも教えていて、その中文系の院生の規模は北京大学には遠く及びませんが、香港では最大です。学んでいる博士や哲学修士の学生は大体四〇名ほどです（香港の大学院では、人文科学系の修士課程は哲学修士［MPhil］と文学修士［MA］の二種類の学位専修に分かれている。前者は学術的、基礎的研究を重視し、レベルの高い学術論文執筆が要求されており、後者はコースワークを主体とした応用的、職業的専修である。原則的に前者のみが哲学博士［PhD］学位専修へと進むことができる。「香港における中国語研究の動向」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』五、二〇〇二年参照）。この四〇名は奨学金を受けている大学院生で、古典文学、現代文学、言語学、古典文献の四大領域に分かれており、この四領域の人

数はほとんど同じです。学生の出身は、半分が香港、半分が外地で、外地の学生は中国大陸からの学生がほとんどです。学生のレベルも高く、しかも熱心に勉強しています。研究テーマについては三分の一が香港文学を研究し、三分の二が大陸や台湾の文学、さらに東南アジア文学、あるいは映画、テレビドラマ、流行文化などに関心を持っています。中文大学の中文系には比較文学や文学理論の専攻は設置されていませんが、個々の教員は興味をもっており、学生も教員の後について研究することができます。ただ全体的に言って、中文大学の学生はとても真面目な態度で研究に臨み、基礎がしっかりとしていますが、理論的思考については北京大学の学生ほど目覚ましいものではありません。

話題からそれますが、銭理群教授が編纂した『中国現代文学編年史』（全三巻。北京大学出版社、二〇一三年）。この本は出版されたばかりで、副題は「文学広告を中心として」です。私が注目するのはこの本の編集体裁ではなく、銭さんが意識的に若い研究者の観点を取り入れたことです。もし最近一〇年の中国の若い世代の研究者が何をしているか理解したいなら、この本を読むといいでしょう。彼は自分がするのと同じことを、ほかの人にも要求しているのです。

王　要求しているとは、どういう意味でしょうか。

陳　この本は個人の著作ではなく、銭さんが編纂したものです。一般的に言って、有名な学者は若い研究者の著作をあまり読みませんし、引用もしませんが、銭さんは多くの時間をかけて精選し、意識して最近十数年の若い研究者の成果をこの本に組み込みました。だからこそ注目する価値があるのです。

香港の各大学の大学院生ですが、学費を自分で支払う文学修士（MA）を数に入れず、奨学金が与えられる哲学修士（MPhil）と博士の学生だけについて言うなら、ますます大陸に偏ってきています。香港中文大学の中文系はやり方がとてもよくて、香港の学生が半分を占めていますが、理工系は基本的に大陸からの学生の天下になっています。残念なことに北京大学の中文系では個々の教員は台湾や香港の文学を研究していますが、力量が十分ではなく、また分野としても私たちは重点を置いていません。私はここ数年、香港中文大学で教えて、香港の学生が中国大陸の文学や現状にますます関心を寄せ、ますます研究に興味を持つようになっていることに気付きました。

ハーバード大学の東アジア研究

王　ハーバード大学東アジア言語文明学科の基本的状況についてお話ししますね。ハーバード大学の東アジア言語文明学科は三、四年生だけが専門的に東アジアを研究する学生です。現在の総数は三〇から四〇名で、三年生と四年生を合わせれば、大部分の専門が社会科学分野です。中国文学や日本文学を専門とする学生は少なく、もし毎年一、二名いたら驚くべきこと、といった状況です。だから大学の学部についていえば、おそらく学生の学位論文とはつまり優等学位（honors degree）論文であり、広い意味で



王徳威教授の
シンポジウム基調講演

の文学に関するものかもしれませんが、専門とはいえないものです。これが第一点です。

ハーバード大学の東アジア言語文明学科には独自の修士課程もありません。修士課程とはいわゆる東アジア地域研究修士プログラムです。以前は三〇から三五名の学生を募集していましたが、現在は二〇から三〇名ほどを募集しており、毎年三、四名の現代文学専攻の学生を採用できたら大したものといった状況です。現在、二名の学生が中国出身で、私と同じ分野の研究をしています。東アジア言語文明学科の中国文学の領域では、六名の教授がおり、二名が古典で、上古、中古、唐宋の専門家です。ほかの二名のうち一名は明清を、もう一名は通俗文学を研究しています。現代文学は私が担当しており、去年の年末にはついにメディア研究のプログラム、つまり広い意味での映画やメディア研究のプログラムができました。現在も比較文学学科の同僚一名が学際的に日中韓の東アジア研究テーマを担当しています。そのため私たちの学科は現在構造の上で明らかに変化しました。現代研究でいえば、テクストとメディアを含めれば、二名の教員がいることになります。国外という立場からすると（日本ではどうかわかりませんが）、私たち六名のチームはアメリカでは相当に整備されているといっていいと思っています。学生の分布については、古典はここ数年確かに衰えており、これは個人的に見て危機だと思っています。以前あれだけいた非中華系の学生は人数の上で減少の傾向にあります。そのため中華系の学生、広い意味での大陸や香港、マカオ、台湾から来た学生が現在多数を占めているのです。私自身はこのことに対してとてもデリケートになっています。とりわけ現代文学は比較的学生を集めやすいのです。毎年六〇名近い受験者がいますが、三分の二はみな現代文学の研究を希望しています。その三分の二のうちのさらに三分の二が中国大陸からの受験者であるため、この中からどのように学生の人数のバランスをとるかは永遠の「芸術」になっています。これら中国の背景

をもつ学生が優秀だとはわかっていますが、彼らを全員合格させることはできません。だから現在私は大体八名の学生を持っていますが、比率の上では中華系と非中華系の数は半々くらいになっています。

人気の研究テーマ

彼らのテーマはとても面白いですね。アメリカでは指導者の数に限りがありますから、どうしても学生の興味に合わせて何でも教えなければなりません。例えば現代詩や現代詩の理論、詩に関する晦渋性、音楽性、翻訳にまつわることなどをやっている人がいます。この学生は今香港中文大学にいます。また別の学生は、「群」と「衆」の文化、文学におけるポリティクスを研究しています。「群」が「民衆」から「大衆」となり、そして「人民」という観点に至ったとき、現代中国のいろいろな文学芸術メディアでどのように現れるのか、左翼的な立場から観察しているということです。清末の梁啓超（一八七三―一九二九）から張芸謀（一九五一―）のオリンピックにおける大規模な演出に至るまでがその観察範囲となります。これがいわゆる、学際的な（interdisciplinary）研究です。壮大なテーマですが、「大きなテーマを細かくやるように」と再三注意を与えたところ、この学生がやりとげたのは実に正確な個別研究となりました。昨日もお話ししたのですが、私には美学を研究している優秀な日本人の学生がいます。美学というものが、どうやって一九世紀末に東南アジアに来て中国や日本で広まったか、その後この美学が中国の伝統的な文論と混ざり合って発生した現象などを考えています。個人的には、この学生は数年に一度の逸材だと思っています。私の学生の中でも最も時代の先端を行っている学生は漫画同人誌を研究していて、日本の漫画（『ヘタリア』）がどうやって日本・韓国・台湾・中国大陸に広まっていったかを研究しています。演劇を研究している人もいます。演劇の舞台装置に取り組み、きわめて正確に研究しています。中国の舞台装置はどのように作られたか、人民大劇場はどうやってできたかなどを考えています。仏教と文学をやっている学生もいて、これはもう私の専門を超えていますから（ここ数年、私は学生たちから何度も「啓示」を受けて、とても勉強になりました）、その学生のために仏教専門の宗教学の教授を探し出したので、三人の教授で一人の学生を指導するということになりました。これは学生にとっては、とてもよいことだと思います。最近入ってきたばかりの学生は、ジェンダーと映画について研究しています。今年は、中華系でないアメリカ人の学生を特に入れたのですが、中国文学のテクストを研究しています。こんなことに興味をもつ学生とは、なかなかのものです。余華（一九六〇―）などの繊細な文章を分析していますが、私はこれは得難いことだと思っています。論文の方向から見ても、ほんとうに多種多様で、学生がやりたいことに沿って私たちが指導するわけですが、これはとても愉快なプロセスであり、また飽くなき挑戦でもあるのです。

陳　藤井さんや王徳威さんに比べたら、私たちの仕事はわりと単純です。北京大学において、私は学術的なことに対する興味の幅は広い方ですが、学位論文の指導の範囲は、現代文学や文化といった範囲に限られていて、お二方のように、仏教に関することまで指導したりはしません。お二方の場合、一つの専門に一人二人くらいの教授しかおられないのですから、学生がやりたがることは何でも、読んで考えて、指導しなければなりません。うちは専門が細かく分かれていますから、それぞれの分野に適当な指導教授がいますので、わりと楽です。

増える留学生

藤井　先ほど王徳威さんが、中華系の学生がますます増えたとおっしゃいましたが、うちも同様です。しかしながら、うちはバランスを考えず、良ければ採るという方式ですから、時には、五人中四人が中国大陸か台湾の学生ということになったりもします。みな日本語一級の試験に合格していますから、日本語のレベルは相当に高いのですが、論文を書くときには、それなりの審美感が求められますから、ネイティブチェックが大きな問題になるわけです。例えば莫言（一九五五―）研究の修論、博論ですと、やはりまず中国当代や莫言の文学について理解していることが必要になりまして、もしそういった方面の知識がないと修正もできなくなってしまいます。だからネイティブチェックのできる日本人学生は限られているのです。以前日本人学生の方が外国人学生より多かった頃は、適当な日本人の学生を探して論文の修正に当たらせたりしていましたが、今では、日本人学生の方が少なくなってしまいましたし、だいたい日本人学生は、博士課程になると中国大陸、台湾、アメリカへ留学してしまいますから、適当な人を見つけられないのです。東大の中文では、これが一番の問題です。

陳　昨日の夕食のときに、前に日本人の学生が四人座っていたのですが、博士課程の学生のほとんどが中国大陸か台湾から来た人で、日本の大学の仕事を探すときに、中国人の方が有利だと言ってこぼしていましたよ。彼女たちは、将来の見通しが立たないと嘆いていたし、この先中国の文学について研究する日本人学生がいるのかどうかわからないとも言っていました。

王　三つ目のテーマに戻るべきかもしれませんね。未来的なジャンル研究に携わることの変異性ですが、もしかしたらテクスト研究を専門的にやらないために、かえってこういう学生の公正な競争の場において影響が出るということでしょうか。私にはよくわかりませんが……。

陳　何年か前、王徳威さんが、中華系でないアメリカ人で中国文学を博士課程まで学びたいという学生がいたら、とても希少価値が高いとおっしゃっていたと記憶しているのですが、そうでしたよね。

王　それはもちろんです。

陳　東大の学部生の中で、中国文学を研究しようとする人もとても少なかったと記憶しています。私のいた年も一人だけでした。京都大学の平田昌司先生が、自分の所はその二倍もいると得意げにおっ

しゃっていましたよ（笑）。

王　私は昨晩彼に話したのですが、東大から来た日本人学生がほんとうにいいんですよ。日本語・中国語・韓国語・フランス語・英語と言葉が五つできまして、アメリカでは主に美学を研究しています。ですからこういった学生はほんとうに希少価値が高いと思います。中国から来た学生のほとんどが特別な力を持っていますね。私の所に一人、ギリシアを研究している学生がいるのですが、彼女はギリシア語も英語と同じくらいできますし、「ギリシアイメージ」がどう中国に入ってきたのか、梁啓超から顧準（一九一五―七四、経済学者・思想家）に至るまでをずっと研究しています。だからこういうタイプの学生には、戦略の上である平衡点を見つけておくことを希望したいですね。アメリカに来ると、その人にとって客観的に見て有利になるという状況があるのを確認して採るわけです。でなければ、私たちが精力を無駄にする必要はありません。

藤井　さっき話題にあがった、「将来中国文学を研究する人がいなくなるかもしれない」という問題については、私はあまり心配せず、比較的楽観的に考えています。というのは、東大大学院で中文を受験する日本人学生は中国大陸や台湾からの学生よりも多いからです。ただ問題は、日本人学生が、外国語と専門の一次筆記試験に合格しないということです。他の大学から東大の中文を受ける学生は、学部に専門の先生が十分にいらっしゃらなくて、知識そのものの不足が目立つのです。他には、今の日中関係は政治的には問題がありますが、経済的には良好です。日中双方の貿易は依然として二〇％を占めていますので、それが背景となって、中国語を勉強しようとする学生はますます増えています。そのため、東大中文の卒業生で博士号を取れば、日本人であれ、外国人であれ、大学の専任講師、准教授、研究機関の専任研究員といった専任の仕事に就くことができるのです。いっぽう東大の人文社会系研究科で博士号を取って三年以内に就職できるのは三〇％にすぎませんから、東大中文の就職状況は、他の専攻に比べてずっとよいのです。

4　今の関心と今後の研究テーマについて

藤井　私は二〇〇五年から、中国、香港、台湾、シンガポール、韓国、アメリカの学者の方々と、四年を一区切りとした国際共同研究を行っています。第一回は村上春樹と東アジア、第二回は東アジアにおける魯迅でした。今年始めた第三回の研究は現代東アジア文学史です。この三回の国際共同研究に基づいて、私にはこれから目指す方向が三つあります。一つ目が、魯迅を主とした五四文学と日本、東アジアとの関係。二つ目が莫言、李昂（一九五二―）、董啓章（一九六七―）らを主とした当代文学研究、中国語圏の当代文学や映画と、日本、東アジア

の影響関係を研究していくこと。三つ目の研究課題は、村上春樹（一九四九―）を主とした日本現代文学と中国・香港・台湾との関係です。他に、私が二年前に出版した『中国語圏文学史』（東京大学出版会）は、来年は中国と韓国で、それぞれ中国語、韓国語に翻訳されて出版される予定です。また一九九七年に出版した『台湾文学この百年』（東方書店）は、もうすでに中国語版が台湾で出版されました。映画に関して言いますと、張芸謀、賈樟柯（一九七〇―）、馮小剛（一九五八―）といった中国の映画監督、王家衛（一九五八―）、周星馳（一九六二―）といった香港の映画監督、侯孝賢（一九四七―）、魏徳聖（一九六九―）といった台湾の映画監督、邱金海（Eric Khoo、一九六五―）、梁智強（Jack Neo、一九六〇―）といったシンガポールの映画監督に興味があります。魯迅、莫言、村上春樹および何名かの映画監督を中心としたこの百年あまりの東アジア文学と映画を今後の主な研究テーマにしたいと考えています。

大学・都市・図像・音声

陳　去年私は「〝現代中国研究〟における四重の視野」という文章を発表しました。副題は「大学・都市・図像・音声」です。つまり目下のところ、この四つの話題、あるいは領域に興味を持っているのです。中国の大学について、学術論文とエッセイとを併せると四冊の本を出版してきたのですが、これからも続けるつもりです。私に言わせれば、二〇世紀の中国の現代化のプロセスを理解するために、キーワードとなるのは教育です。あらゆる「新しい知」は、体制化されてのち初めて広範に伝播し、大衆の日常生活に入り込んでゆくのです。教育について考えることは、私の仕事の重点になりますね。けれど、銭さん（銭理群氏）が小、中、高にも興味を示しているのとは違い、私の関心は大学にあります。ここ数年、大学の問題について語るときは、歴史に対峙すると同時に現在の状況にも注意し、学術研究と文化的な啓蒙とを兼ねた仕事をこころがけてきました。

二つ目の話題である「都市」は王徳威さんと関係があります。私たちは「都市のイメージと文化の記憶」というテーマのもとで何度か国際シンポジウムを共催してきました。私自身も論文を書いていますが、もっと大事なのは学生を育てることです。北京大学版の「都市のイメージと文化の記憶」叢書には、博士学位論文をもとにした論文がすでに六本掲載されています。しばらく前に口頭試問を合格した『北平陥落時期における読書人の倫理的境遇と修辞戦略』（袁一丹）や『文人グループと現代天津における文化的空間』（黄育聡）など、どれも素晴らしい出来です。さらに、今在籍している博士課程の学生は、ちょうど『公園の北京――都市におけるモダニティの隠喩』というテーマで書いていますが、これも期待できます。あとしばらくすれば、私が指導しているこれらの学生が、新しい天地を開くかもしれません。

三つ目の話題は「図像」です。何年か前に香港三聯書店から出した『左図右史と西学東漸――晩清画報研究』（原題

『左図右史与西学東漸――晩清画報研究』二〇〇八年）にずっと手を入れているのですが、なんとか来年には北京の三聯書店から修訂版を出そうと考えています。晩清の画報という方面についてはまだ別の仕事もあるのですが、ずいぶん長い間関わっていますので、来年にはけりをつけたいところです。

四つ目の話題は「音声」です。何年か前、『文学評論』に「有声の中国――〝演説〟と近現代中国における文章の変革」（原題「有声的中国――〝演説〟与近現代中国文章変革」）を書いた以外に、私はいくつも「演説」についての論文を書いてきました。「演説」以外に、「教室」「劇場」「説唱」「朗誦詩」などが考えられますが、このテーマについてはまだ書き終えていません。

さらにもう一つ、私が長い間関わり、五、六本ほど論文を書いてきたのは「現代中国の述学文体」というテーマです。私は、モダニティとは思想体系であり、思惟の方式であり、生活の方式でもあると同時に、表述の方式でもあると信じています。そこで私は「表述方式」という角度からこの問題を討論することにしました。私の考えでは「表述」とは、日常生活の表述、文学者の表述のほかに研究者の表述をも含むものです。いま皆さんが従事している仕事――例えば大学での教育、執筆、そして学術会議での報告、討論などなどの活動は、その思考回路からパフォーマンスに至るまで、言葉から術語に至るまで、基本的に伝統中国とは大きく隔たっています。先秦と違うというだけでなく、宋、元、明、清の書院とも異なるものです。言い換えるならば、私たちは観念と思想を変えただけでなく、思惟の習慣を変えてしまったのです。学問の内容を変えたのみならず、討論の方式も変わってしまったのです。残念ながら、この本は途中で投げ出したままで、まだしっかり構想できていませんし、すぐに世に出そうとも思っていないのですが。

新しい文学史

王　いま完成したばかりの英文書が『叙事詩の時代の抒情』（*The Lyrical in Epic Time*, Columbia University Press, 二〇一五年出版予定）です。この本は二〇〇六年、陳さんが私を北京大学に招いてくれたときに構想しはじめたものです。今思うと、あの時はあまりにも大胆でした。研究を完成させないうちに授業をしたのですから。まぁ、教学歴も長いですからね……。今この本をなんとか完成させることができて本当に嬉しいです。この本では、陳国球さんと一緒に考え、そして彼から大きな啓発をうけたテーマである「中国における抒情の伝統」について論じています。もちろん、このテーマは伝統文学と文学論の中に分け入ることを必要としました。まさに模索の連続でしたし、私自身たいへん面白いと思うと同時に、まだ自信をもてないところもありますから、これからも引き続きこのテーマを考えていくことになると思います。これはつまり、中国の伝統と現代を、文学がどうつないでいたかという問題に関わるものですね。二〇世紀の文学がすでに文学の伝統の一部になろうとしていると

き、現代文学における伝統性をどう考えるか、について一つの方向性を与えるものです。

さて、いま私がハーバード大学出版社からハーバード版『現代中国文学史』を出版する準備を進めているのをご存知の方は多いでしょう。これは大きな議論を発揮するタイプの本ではありません。アメリカの客観的な環境の制限をうけていまして、小規模な文章、しかも個性をもった文章を、一五〇集めて文学史を綴ろうというものです。先ほど話題にあがった銭理群さんの新著、『中国現代文学編年史』について、銭さんはＰＤＦ版を私に送ってくれまして、大部分を読んだのですが、本当に素晴らしいと思いました。「広告」が商業広告だけでなく、学会、学社の発刊の辞なども含んでおり、天下に広めるという論述のスタイルを意味するのだとは考えていませんでした。ハーバード版文学史は少なくともあと二年はかかるでしょう。いまその過程に身を置いて、私はたくさんのことを学んでいます。苦しくはありますが、得難い機会ですね。

また、私はずっと中国の現代、つまり二〇世紀の文学論と西洋の文学論との対話という問題を考えてみたいと思っていました。ご存知のように私は比較文学の出身で、西洋の文学批評も長い間やってきました。フーコーからバフチン、それからデリダなどです。しかしここ数年、これはちがう、これはだめだ、という自覚が出てきました。もはや、学生にフーコーを読め、デリダを読め、そうすればどうやって中国現代文学を料理するかわかるといってすませられる時代ではなくなったということです。一つの世紀が終わった後――特に、西洋の言語環境の中で中国文学と文学批評について教えるようになってから――、私たちには反省が必要だと思います。それは誰かと誰かを比較するという問題ではなく、少なくとも平等な対話のプラットフォームにたって思考しようということなのです。中国の知識人たちがこの百年のうちに、文学への見方、文学への論述について何を提供してくれたのかということを。魯迅の『摩羅詩力説』（一九〇八年）、王国維（一八七七―一九二七、清末民国を代表する人文学者）の『紅楼夢評論』（一九〇四年）などのほかに、もっとたくさん取り上げるべきものがあるはずです。魯迅にはもっとたくさん語るべき著作がありますし、王国維だってそうでしょう。章太炎（一八六九―一九三六、思想家、革命家）について取り上げるべきか、黄摩西（一八六六―一九一三、文学者、社会活動家）について取り上げるべきか。そして梁宗岱（一九〇三―一九八三、詩人、翻訳者、文学評論家）がおり朱光潜（一八九七―一九八六、美学者、文芸理論家）がおり、李沢厚（一九三〇―、美学者、思想史家。一九九二年に渡米）らに続いていくわけです。これらすべてに私は興味をもっています。ただ、私に系統だったものを書く力量があるとは思えません。しかしこうした、西洋の学術界以外の方法による多くの「出会い」、つまり各世代におけるこうした文学論、文学論点の出会いを検討することで、何かのきっかけを作れるかもしれないと思っ

ています。特に比較文学系の研究者に対して意味を持つかもしれません。西洋の文学論を基礎にした比較文学方面ではもうずいぶんいろいろな研究が重ねられていますが、私たちの方法論は、基本的にはまだ比較的偏ったものになっています。この時、この地アメリカで中国現代文学を教えているときには、このような自覚をもつべきだと考えています。反帝国主義、反植民地主義、こうしたビッグセオリー以外に、本当にテクストの内部に戻り、この百年で中国の知識人と文人が広義の文学に対してどのような見方をもっていたのか、振り返るべき時が来たのだと思います。

サイノフォン文学の可能性

藤井　もう少しつけ加えさせてください。私はこれから、もう少し翻訳の仕事をやろうと思っています。中国、香港、台湾の同時代作家の翻訳以外に、魯迅や張愛玲など、現代作家の作品を新たに訳したいと考えています。日本の文庫本や修訂本などの新訳を通して、より多くの日本の読者に中国文学、華語文学の魅力を紹介したいですね。

王　私ももう少し言い足しましょう。華語語系（Sinophone）文学は近年たいへん盛んになっています。しかしながら、華語語系とは何かという問題はのこされたままです。私自身が大きな時間と精力をさいてこの問題に取り組む予定は今のところありませんが、しかしこういう問題があることは確かですね。ここで提起させていただき、そして日本の同業者、そして中国大陸からやってきた同業者がこの問題に注意を向けてくれることを希望します。私が長い時間をかけて取り組むことはないかもしれませんが、これは今日の鼎談のテーマ「中国現代文学とは何か」に関わるものです。華語語系とは必要な存在なのか、また過去の華文文学、あるいは過去の海外文学、世界華文文学、あるいはもっと古い華僑文学とどのような関係にあるのか。華語語系という概念の提起は、私には一つの現象のように感じられます。特に藤井教授がここ数年ずっと、海外における華語創作や台湾、香港の華語創作に関心をお持ちだったとすると、翻訳はもちろん重要な一側面になりうるわけですが、翻訳以外にどのような方式で、華語語系文学の弁証性、あるいは抵抗性を示しうるでしょうね。このテーマは注意に値すると思います。

〔付記〕　二時間あまりに及ぶ鼎談の記録を文字に起こしてくれたのは施元昊さん、鄭洲さん、劉霊均さん（ともに神戸大学人文学研究科）の三人である。専門用語の飛び交う難解な議論を正確に書き起こしてくれたことに感謝申し上げたい。翻訳は冒頭より、阿部沙織さん、池田智恵さん、城山拓也さん、田村容子さん、津守陽さん、羽田朝子さん、平松宏子さん、そして濱田が分担して行った。最終的な用語の整理は濱田による。

（二〇一三年八月五日　愛知大学車道校舎）